島人（シマンチュウ）によるムガリ評

賛成派「この荒廃の島（枝手久）には、たいはいのシンボル、ヒッピー族が住んでいる」
月刊郷土誌「奄美の島々」

反対派「あんたらは大学まで出て、何でヌこんなところに来る気になったんですか？」

賛「あの種族は、"精神的浮浪者"と言われている種族なんですよね。従って原始的生活を営むために労働しない、というのがタテマエなんですよネ」　村会議長

反「どんなに枝手久を守っても、あんたらの物になるわけではないという事が分っていながら、よくやりますね！」

賛（ムガリの女性に）「あんた、なんで金持と結婚せんのか？」

反「私はあんたらが良い人だと信じられるし、反対斗争の力になってもらって本当にありがたいと感謝しているのですが、本当のところ、どうしてそんなに一生懸命になれるのか、さっぱり理解出来ないのですよ」

賛「余計な口を出さんで、奄美のことはワシら島人に任せておいもらいたいな」

反「あんた達はサルみたいなもんですね、何でもすぐ真似して覚えてしまうんですからね、やっぱり頭が良いですからね……」

賛「彼らは集団的な、原始的な生活へ戻りたいという一種の文化人から離れたような人間なんです。そこに恐いところがあるんです。そこに問題があるんです。一番恐ろしいのは、この人間の分子なんです。世界中に散らばっている……こういう人間に法律なんか振り回された場合どうなるか？」

反「僕だってヒッピーになりたいと思ったことだってあるんだよ」

賛「あんたらが、国際ヒッピー連合の組織の者だというくらいは、ちゃんと調べがついておるんじゃ」

反「乃木大将でしょ、東郷元帥でしょ、西郷さんでしょ、あの人達はもうこの世にはいましぇんが、名前は残っておるでしょうが。今にあんたらと橋口さんの銅像が、枝手久島に立ちますぞ、ヒヒヒ……」　久志のヌビウジ

賛「彼らはヒッピーの名を騙る不穏分子であり、以前はスワノセ島で、天下のヤマハと争って、島を我が物にしようとした、札つきの悪党である」

反「あなたらは、一ケ所にどのくらいの期間滞在して戦われるのですか？」日共幹部

賛「あいつらには、外人の仲間も沢山おる。コレラ菌なんか持込まれて、この部落が絶滅するということも十分考えられる」

反　博文「君達はしかし、根っこもないのによくはびこるなァ」
ポン「根っこが無いわけではない、ただ根の付き方がちがうだけのことだ」
博文「そう言えば、奄美には"根なしかずら"というやつがある」

賛「あんな連中に奥をとられるくらいなら、海を埋立てた方がましじゃ」

反「奥ありがとう、島にいるヤマトンチュウから、大和にいるシマンチュウに、島の味を届けてくれて、何とも言えない味でした。とにかくおいしかった」　関東奄美青年部

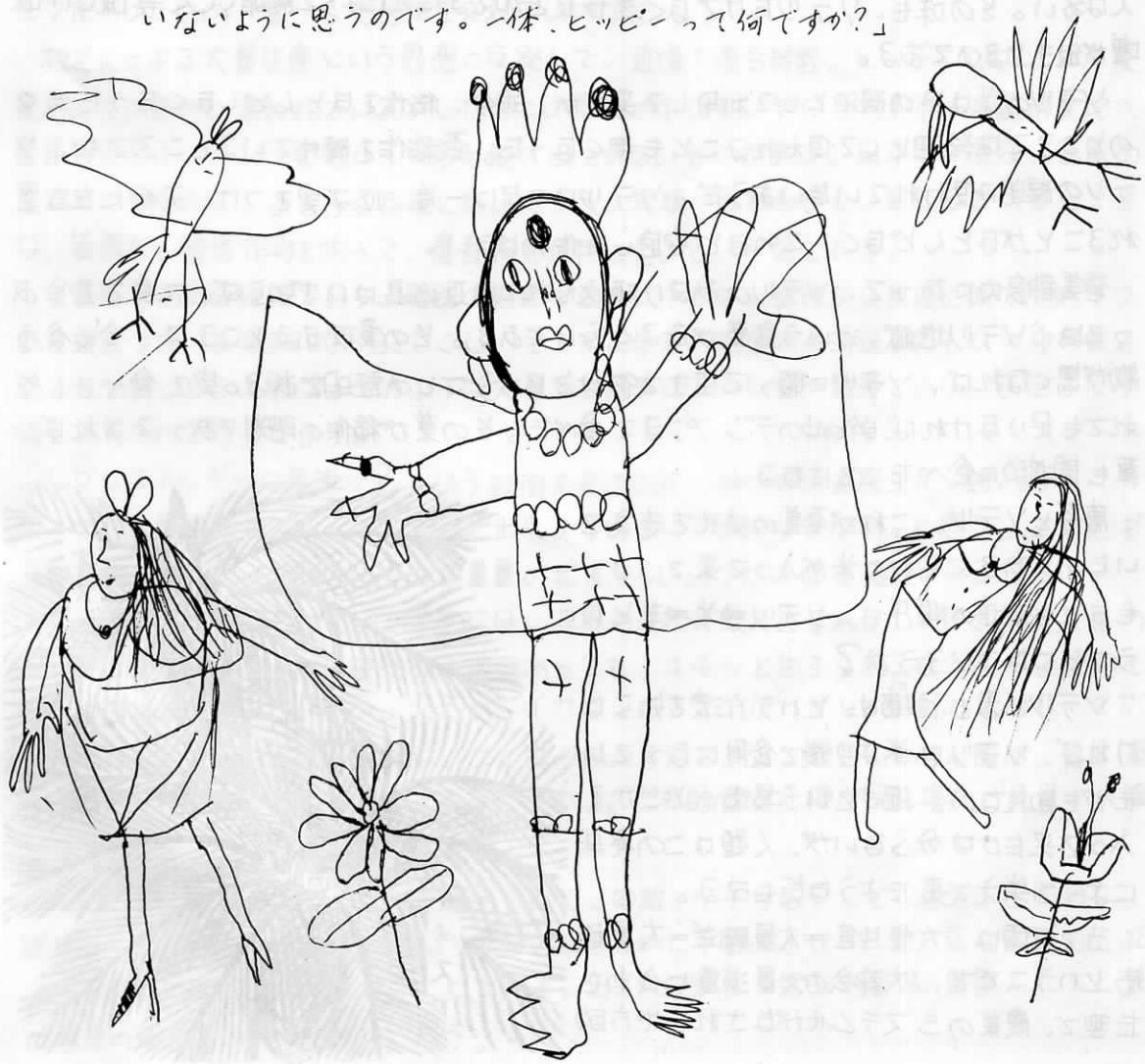
賛「彼らも人間には変りない。頭もあれば手足もあり、キンタマもある。これ人間です。しかしその思想というのが文明的な人間の思想ではないと見るのです……これでも人間と言えるのかどうか？」　生勝部落のボス

反「あのな、ボクな、この間生勝に奥売りに行ったらな"ヒッピーが来た。"って言いよんね。ハハハ……ケッサクや」　山下秀喜

賛「ヒッピー連中の売りに来る奥だけは買う気にならん」

反「彼らはヒッピーではない、ワシらと同じに仕事もするし信念もある。あんたらいつまでもそういうバカな差別をしておるから、ヤマトになめられるんじゃ、もし彼らがヒッピーなら、ワシだってヒッピーじゃ」　山下秀喜のオヤジ春英

旅行者「あなたがはヒッピーと言われていますが、私の見たところでは、私達と何も変っていないように思うのです。一体、ヒッピーって何ですか？」



盗作随想2 「島を守る農」 新元博文

奄美の栽培文化は、日本々土とはその植物分布から言っても当然異る。私はこの数年来枝手久斗争を通して、シマ社会を守ることに専念して来た。「シマ社会を成立させているものは一体何なのか？」という疑問を発する時、「そこに住むシマンチュウとは何者なのか？」ということに焦点が絞られて行く。そしてそれは必然的に、「シマンチュウは何を食って生きて来たのか？」という、食生活史や栽培作物史をあれこれ探ることでもあった。

その結果、日本では栽培されておらず、栽培されていても食用されていない作物が、奄美では大量に栽培され、食用にされていることに気づいた。それはソテツを筆頭に、ヤマイモ類、戦後南洋から持ち込んだタピオカ、昔からアレルト、葉野菜としてのハンダマ、果実としてのパパイヤ、バンジュロウ等々。

現今、我々はあまりソテツを利用しなくなった。それでもソテツの実の味噌を作っている人は多い。その味も、ソテツだけでなく麦や豆を加えることによって素晴らしく美味しい味噌が出き上るのである。

ソテツの葉は田の緑肥として利用して来たが、現今、稲作をほとんどしなくなった我々のところでは緑肥として使われることも無くなった。否稲作を続けているところでも、ソテツの緑肥は使われていないようだ。ソテツは二年に一度、必ず実をつけ、天候に左右されることがほとんどなく、これほど安定した作物はない。

奄美郡島内にあって、ソテツのあまり植えられていない島はいざ知らず、大島本島にあっては〝ソテツ地獄〟という言葉があるくらいである。その意味するところは、全く食う物が無くなれば、ソテツに頼って生きて行けるということの証明である。実を食べて、それでも足りなければ、幹の中のデンプンまで食べた。その葉が稲作の肥料であってみれば、葉も間接的に食べたことになる。

唐芋とソテツ、これが奄美の文化を支えていたのである。それに米が入って来ている。もっとも栽培の順序は、ソテツ⇒米⇒芋ということになるだろうか？

ソテツの毒を〝晒す〟という方法を知らなければ、ソテツは米より後で食用になっていたかも知れない。晒すという技術がどこから入って来たかは分らないが、人類はこの発明によって栄えて来たような気もする。

さて近頃は、大量生産＝大量輸送＝大量販売ということで、大都会の大量消費に合わせた型で、農業のシステム化がなされ、地方的

豊かさを誇って来た多様な栽培作物が、日本から姿を消すような時代にある。

機械文明といわれ、近代的農業といわれ、さも素晴しく見える現代であるけれども、このような大量消費に含めぬもの、特定地域にしかなじんでいなかった食物がだめになって行くことは、あまりにも悲しいことではないか。

昔は色々なものを作り、様々な物を食べて来た。しかし現在は同じ食物が、季節を問わずに手に入る代わりに味も落ち、全国的に全てが平均化され、都会も田舎も変りない食生活になったことへの反省が必要になって来た。

観光客にだけ、地方色の豊さを見せようということで、高い値をつけた郷土料理というものが出されているけれども、所詮、銭の世界の物語である。金銭は必要であるけれど、〝地方色〟が金銭の対象でしかなく、観光ムードの陰で銭をもうけというのでは、あまりにも悲しい。経済と言えば銭のことだと割切って、何ら疑うことのない人間ばかりが、やたらと増えて来た。もう少し他に考えようもありそうなものだと思う。なぜもっと豊かなシマ作りのための、豊かな発想が生まれないのか？

機械化による大量生産という思想に反発して、近頃〝復合経営〟ということが、日本農業の再生の要だと言われている。しかしこの思想の中にも、やはり大都市＝大量消費地へ農産物を売る、という発想から一歩も脱け出ていないものがある。日本中に現在、昔風の農村というものは、おそらく存在しないだろう。地域が自給自足し、自立しているところは、皆無だ。輸送作物を作って、農産物を他所に売るという型である。

金銭経済は流通経済であり、輸送の範囲が国内だけでなく国際的に無限に拡大されつつある現状では、ますます地方色をなくし、全てが国単位の特産物の流通システムの中に飲み込まれて行くように見える。このような大量流通経済はエネルギー経済であり、まだまだ今後も拡大されて行くだろう。

しかしエネルギーは無限か？という疑問を発する時、我々は流通経済から逃れるというか、それと無関係にちゃんと自給自足出来る準備をしておく必要があると思う。エネルギーは無限ではなく、人口増加とその消費量の拡大から、いつかは必ず破綻が来るだろう。

シマを守り、真の自治を守るためには、世界の流れに飲み込まれることなく、もし世界の流れが止まるか、それとも破綻する時があっても、キチッと生きられるものを作る余裕をいつも残しておくべきだろう。久志のジイサン、バアサンが「イザという時のために、イザトを残しておくんだ」というのは、ごく当り前の考えである。幾百人もの人間が、奥里（枝手久島）だけで生きのびられるのは事実である。世界的食糧危機が来た場合、「奥里のお陰で生き永らえる」ということになるのだ。

今のうちに奥里に色々なものを植えておく、勿論、ソテツもどしどし植えると同時に、雑木の下で息絶えだえになっているソテツを守るために、雑木を伐切して、昔の段々畑を拓いておくことは何よりも大切なことである。出来れば私も、無我利道場の奥里人たちと共に奥里の畑を拓いておきたいと思う。

ともかくこの考えは、奄里だけでなく、私の平田部落をはじめ、あらゆる部落に言えることであり、特にソテツ畑のソテツを枯死させないことは重要である。奄美大島の段々畑の周囲には、ほとんどソテツが植えられている。見捨てられたソテツ畑にウラジロエノキをはじめとする亜熱帯雑木が繁茂すると、陽樹であるソテツは少しづつ衰えて行く。

ソテツは一年二年で育つものではなく、幾百年にも渡って我々の先祖が育てて来たものなのである。「ソテツ畑を守る思想、戦いこそがシマを守る」ことに通じると思う。この考えは当り前のようであり誰もが気にしていることでありながら、つい忘れてしまい勝ちである。当面はソテツ味噌を作り、これを販売することでも良いし、また段々畑にスモモその他の果樹を植えることだって良いだろう。要は段々畑を見捨てないことに尽きるであろう。

段々畑の活用はその他種々に考えられる。ウラジロエノキはキクラゲ用材として適しているし、また桑畑に利用することも可能だ。

日本が栄えたと言っても、ほんのここ20年のこと、2~30年後に予想されている石油枯渇や食料危機のパニックも、アッと言う間に来るのである。何も大都会だけが人の住む場所ではない。人間は機械を食っては生きられない。石油は食べられない。いかなる時代が来ても、食は農、漁業に頼るしかないのだ。

「イザという時のためにイザトを守る」という久志の老地主たちの知恵には、東亜熱料の銭も通用しなかった。その奄里には、高度工業化文明に未来はないことを悟って、それを拒否した若者が住みついている。それも一人ゃ二人ではない。

我々がシマで生きて行くためには、単に金になる農業というだけにとらわれてはならない。奢れる者は必ず滅びることは世の定めである。我々は決して奢ってはならず、又奢れる者に同調してもいけないのだ。

現代の流れは清流でなく濁流である。流れに逆らえばはじき飛ばされるかも知れないが飛ばされた足もとを見れば、そこに清流が湧いていることに気付くではないか。「文明の時代から文化の時代へ」としきりに叫ばれているが、この〝文明文化論〟で一体どれだけ整理されるか分ったものではない。しかし我々は自らの手によって、自らの世界を創造するしかないことは確かである。

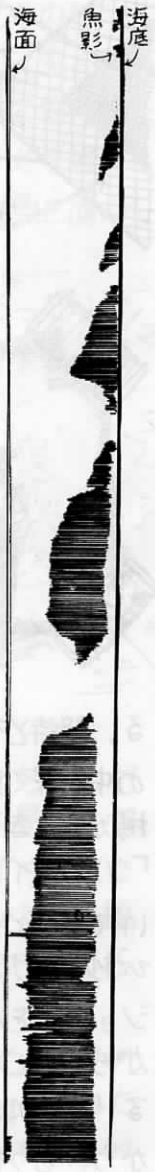
若者のUターンも単に帰って来ただけでは何にもならない。奄美の場合、Uターンが、名瀬市にとどまる。名瀬も都会だ。本当のシマ、部落社会へUターンするのは、もっと先のことだろう。

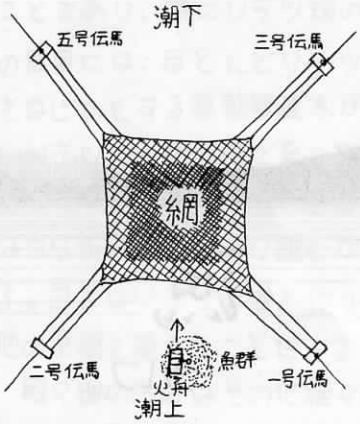
あぶり漁

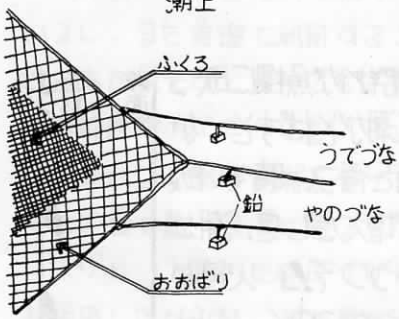
ウルフ

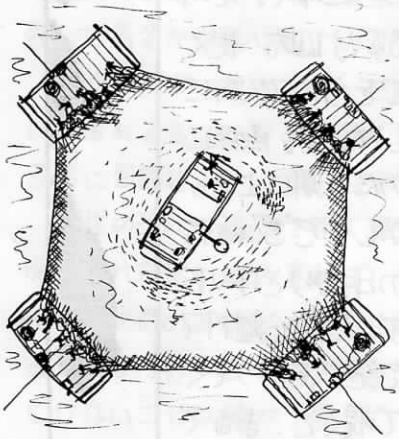
出漁

潮はとばし　まるで川の様な流れだ。ちらっとムロアジの群れが魚探に映ったが　どんな群れなのか　未だ見当もつかない。「こんなに潮がとばすと　かえって止る時はピタッと止まるぞ、その時が勝負だ！」　潮時を待つ。時々、飯粒を海に投げ込んでは潮を見る。魚探に映るムロアジの影が増えだした。潮がゆるくなってきたのだ。「伝馬ァ起きるよ、かなご(アンカー)うつぞ！」　火舟から音高れに乗り移りかなごをうちにゆく。火舟から少し潮下に下がったところより四方へ長くロープをのばしてうつ。かなごをうって火舟に戻ると忠清おじがやけに興奮している。魚探にムロアジの本隊が映りだしたのだ。潮は止まった。群れの厚みは20m、しかし未だ(海底)についている。「伝馬ァ網とれよォ！」　水中灯をあげ、集魚灯の明かりを序々に絞る。魚が光の変化に驚いて一時散るがすぐ又集まる。少しずつ(海底)から離れて浮いてきた。よしよしもう少しだ。時々ムロアジの吐き出した泡があがってくる。大きな泡だ。テッポウ(大物)の群れだ。かがみとう(箱眼鏡)で覗くと、まるで弁当箱の飯粒の様に、ひしめき波うつムロアジ。水深七、八メートルのところか　魚探が三十メートルに増えた群れの厚みを映している。何万斤という群れだ　未だ(海底)から一二メートルしか浮いていない。充分に浮かないうちに網に入れると魚に網をきづかれる。そうなったら今夜の漁はパァーになる。でも、もううきしろがいくらも無い。潮が又動きだしそうだ。今網を張らなければ、今夜はもう見込みがない。伝馬は網をとり終って"網はれよ"の声を待っている。「一かハかやってみるか。」　春英さんは伝馬船頭と談合する。「よし、やろう」　いっせいに網を張る伝馬の掛け声がきこえてくる。ヨイサァ　ヨンヤサァ　方形に拡げられた網は静かに海底へ沈んでゆく。底についた頃をみはからって火舟はもやいを解き潮に流されぬ様に漕ぎ始める。春英さんと俺が艇と艇でか









いを握る。忠清おじは魚探を睨んでいる。「潮上の伝馬ァかなごおどらせよォ!」火舟から声がとぶ。「そろそろやらせよォ!」かいを握る手が緊張する。一号伝馬と二号伝馬の間をゆっくりゆっくり漕ぎ入れる。ムロアジはそっくりついてきている。もうすぐおおばり(網の縁の部分)を越す。よしうまく越えた。網の中心へと火舟は進む。伝馬は火舟の合図を息をのんで待っている。ここらが真中あたりか「もう少し下がれ」「ムロはそっくりきてるぞ」「よし、やらすぞ」「やれ! やれ! やれ!!」火舟がグルッと一回転する。「やれ! やれ! やれ! かかれよ、かかれ!」伝馬はいっせいにヤノ綱とウデ綱を揚げにかかる。掛け声とウィンチの音が発電機の音にまぎれて聞こえてくる。伝馬舟の方陣が段々狭まる。伝馬の網の揚がり具合で 三号寄りだ五号寄りと火舟を漕ぐ。伝馬の皆の顔が見えてくる。無我夢中で綱を手繰っている。「あがったぞォ!」何号伝馬か真先に網の揚がった伝馬から声がする。「おおばりかかれよ! おおばりかかれよ!」おおばりは揚がったが、なかなかふくろ(網の中心部分、網の目が細かい)が揚がらぬ。大群がそっくりはいったぞ。方陣は狭められ 伝馬どうしもやいがとられる。火舟は魚探のあし(アンテナ)をあげ方陣の外へ出て潮下にまわる。伝馬に乗り移り網を揚げる。期待と不安が入り交じる。魚探ではわかっていても現物をみないと安心できない。網の中、深く真っ黒な群れがみえる。ムロアジの吐きだす泡がやがてビールの泡の様に涌き揚がる。まるで何千トンもの船のペラにかきまわされたかの様に海面が渦巻き盛り上がる。「バンザイ、万斤、大漁」「ヤッタ、ヤッタ」どっと歓声があがる。ムロアジを取り巻いて喜びと安堵に皆表情が崩れる。「サシミかみんしょれ。」たぶで大きなムロアジを選び抄ってサシミに捌き、弁当を喰う。弁当箱のふたにサシミを山盛りにし、クシュ(唐辛子)とショウユをぶっかけてかきまぜる。喰い終ったら積み込みだ。魚をバイラでくんでは伝馬から本船に手わたす。魚は水氷をしたハッチの中へ、魚のはね飛ばす鱗が全身にふりかかる「名瀬ゆき大名早く乗れよォ」魚を積み終えると若い者が乗り組んで名瀬の揚場へと向かう、もう夜が明ける。かなごを揚げて御帰還だ。大漁旗をあげ、朝日を浴びて...

ゆさばくり

名瀬漁協の揚場での入札が始まったが、なかなか我がムロアジの番は廻ってこない。名瀬漁協の組合員優先という訳だ。他の地区の漁協組合員は後まわしにされる。私達の地元：宇検漁協には揚場がないので魚が獲れた時は名瀬に持っていくか自分達で売るしかない。　竜昇丸が名瀬漁港に姿を見せるとムロアジの落札値が下がるというほど我々が獲るムロアジの名瀬市場に及ぼす影響は大きい。万斤ちかくのムロアジを持ち込めば値崩れは必至だ。大漁が続き市場に魚がだぶついて、キロ数十円という値しかつかない事もあった。

買い手市場だ。仲買人が、それも冷凍倉庫等を持っている大手の業者が、幅を利かす。彼らは買い溜めが出来るし、無利に買う必要もない。こっちはともかく船から魚を下さねば次の漁に出られない。いくらでもいいから引き取ってもらいたい。いきおい足元に付け込まれるのも無利はない。去年も何度か大漁にもかかわらずくやしい思いをしたものだ。

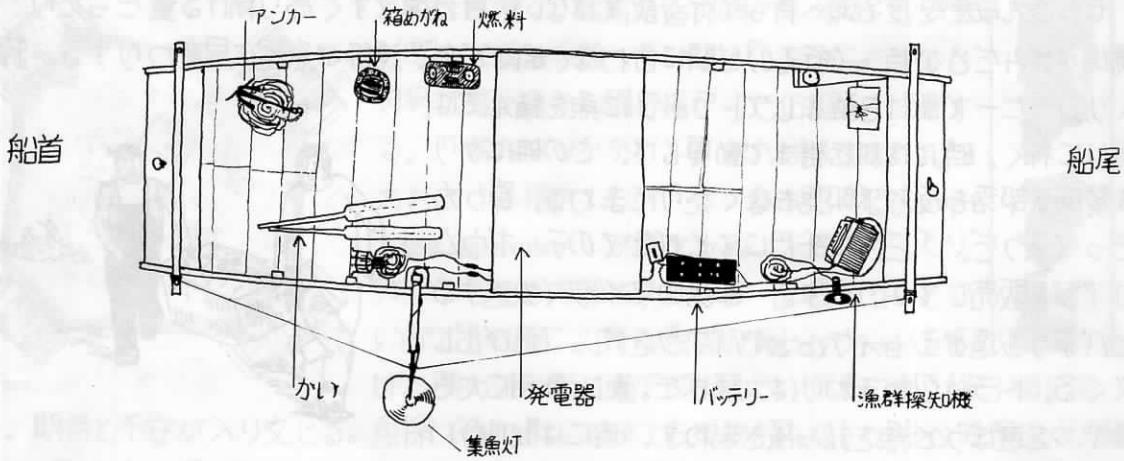
私達が安値で泣いた分を魚を買って喰う人が喜んでいるならまだいいが、ほくそ笑んでいるのは仲買人だけではないか。安く買い叩いた魚を右から左へ廻すだけで二倍三倍の値で売る。キロ数十円の魚が小売り店にいくと数百円となる仕組みだ。人のうわまえを撥ねて喰ってるやつがいる。もし自分達で冷凍設備を持っていたらみすみす捨て値で魚を置いてきたりはしないのだが。

もちろん毎度毎度名瀬へ持って行く訳ではない。自分達ですぐ売り捌ける量だったり、揚場が休みだとか持って行くのが間に合わない時などだ。漁師が魚屋に早変わりする。罐入りコーヒーで眠けを醒ましてトラックに魚を積んでは売りに行く。時には耕耘機まで動員して。この時ばかりは賛成派部落も反対派部落もなく売りにまわる。買う方だってそうだ。「三キロ千円にてとれたてのテッポウムロアジを販売しております。」部落のマイクで放送するとバァサン達がショウケ(ざる)やバケツを持って飛び出してくる。トラックのまわりは大騒ぎだ。刺し身用に大きなやつを選ぼうと魚を引っ掻きまわす。時には取り合いまでする。売り手としてはあまりいじりまわすと魚がだれるのでつい「大きいのを選んだら一キロ四百円ぶっ込みで三キロ千円だよ。」などと叫ぶ。秤にかけると秤の針を見もせずに負ける負けるとうるさいこと。皆五キロ十キロと魚を買う。一人暮らしのバアサンでさえ十キロの魚を買っていく。十キロの魚というとバケツにはいりきらないぐらいある。塩をして陽に干して保存するのだ。冷蔵庫ができる前からのやり方だ。ヤマトに出ている子供達に送ってやる為に干魚を作るという人も多い。漁師部落の名残りだろうか。

サキバル(湾口部)の部落ではこの様に売れるのだがウラウチ(湾奥部)の部落では様子が変わる。まず入れ物を持って買いに来る人はあまりいない。大概がこちらが持っていったビニール袋を利用する。自分で魚をさわったりしない。計った魚がビニール袋に入れられ

て手渡されるのをきれいに一列に並んで待っている。商店や行商の車から買い慣れているからだろうか。そういえば買う量も一キロ単位、今夜のおかずという具合で買っていく。店にさえ行けば何時でも何でも買えるからか、サキバルのほとんどが反対派で、ウラウチのほとんどが賛成派というのもなるほどと納得がいく。

昨年は漁にも恵まれて漁獲高は一昨年をゆうに上まわったが、売り上げの方はそうゆうわけにはいかなかった。瀬戸内のまき網漁が競争相手としてでてきた事もあり、大漁が続くと仲買業者に買い叩かれたのだ。自分達で売りにまわればいい値で売れるのは分かっているが、夜は漁に出て昼は行商という事になると、寝不足過労は免れない。海の上では命とりになりかねない。行商を漁に出なかった人にたのむという手もあるが、漁は水ものだ大漁の時は猫の手も借りたいほどだが、不漁の時はどうするか。獲れない時は何日も漁に出れないこともあるのだ。その時それだけの人を遊ばす余裕はない。冷凍設備があればどうか、確かに魚を一時ストックすることができれば非常に楽だ。出荷もある程度調整できる。しかし、これには相当まとまった資金がいる。ともかくこのままでは頭打ちだ。かつての鰹漁のようになってしまうのではないか。あれ程栄えた鰹漁が、ザコニンテ、コヤニンテと部落中で従事した生産共同体が次第に崩壊したのは餌の減少や台風の被害の為だけだろうか。



宇検村 漁業の流れ

宇検村は鰹漁に沸き、漁業で経済をたてた部落も多かったところだ。1900年 曽津高崎燈台の建設にきた技師が この周辺が鰹の好漁場であるのを発見した。先ず屋鈍で鰹一本釣りが始められ、阿室、平田、久志、宇検と次々に広がり盛んになっていった。若者は一本釣りに、中年は餌とりに、女年寄りは鰹節制造にと部落中が沸きかえった。最盛期にはビールで足を洗ったといい、屋鈍では大正時代に国会議員の選挙权を持つ者もいたという。

やがてヤマトの漁船が進出してくる様になった。この頃のヤマトは乱獲により沿岸漁業が衰退し、沖合、遠洋へと漁場を拡大していく時期だった。国は1898年に遠洋漁業奨励法

を出し1919年には南洋漁場調査を行なっている。

どんちゃん騒ぎに明け暮れた鰹景気も昭和にはいり、ヤマトの漁船の進出が本格化するにつれ下火になっていった。鰹節の値は下がり、鰹漁組合の経営は悪化した。餌の減少や台風　竜巻等の災害が加わるや組合は次々と解散していった。好況時には九州四国あたりから出稼ぎに人が来ていたというが、今度は逆にシマから枕崎や山川、焼津などの漁業基地へ出稼ぎに行く人が増えた。ヤマトの船に乗って奄美近海にも漁をしにきたという。

鰹漁業が衰退していく中で、餌とりのキビナゴ漁の技術をそのまま活かしてムロアジアブリ漁が起った。最初はムロ節製造を目的として、やがて鮮魚としてと内容は変わりつつも戦後もアブリ漁は続けられた。しかしヤマトが高度経済成長を唱えだすやシマの人口が激減し始めた。村落社会の例にもれず過疎老齢化の波をかぶった。人手不足からアブリの灯は一つ一つ消えていった。1968年宇検村で最後まで残った平田のアブリの灯が消えた。

1973年村落社会が過疎に喘いでいるところへ枝手久島石油基地計画がもちあがった。宇検村は二派に別れ対立反目しあうようになり漁協も賛成2：反対1の漁業权放棄寸前の状態で対立が続いている。奄美に対する石油基地計画は枝手久にとどまらず、伊須湾、伊子茂湾、笠利湾　おまけに核再処理工場に原船むつ母港、今度はヤマトは奄美の海そのものを奪いにきた。

奄美の海は今別の形でも奪われつつある。奄美水産業のヤマト資本系列化だ。芦検の真珠会社は宇検漁協一番の株主だが資本はヤマトだし、昨年から平田アブリ組合の競走相手となっているまき網漁をやるグループもヤマト資本だ。両方ともトップにいるのはヤマトンチュウだ。他にもヤマト資本が入ってやっている養殖業者もおおい。富をヤマト中央へ吸い上げるシステムがつくられつつある。

1974年東亜燃料が枝手久進出計画を発表した翌年、反対運動の盛りあがりの中で平田にアブリ漁が再開された。しかし再開されたといっても過疎が解消されたからではない。かっては二組のアブリ組合のあった平田も今では一組の組合でさえ平田チュウだけではやっていけない。昨年のアブリ漁では二十四名の出漁者のうち平田チュウは半数、後の半分は近隣部落の反対派の人と枝手久闘争勃発後に奄美に入植した私達などである。

私達も石油基地に反対する漁師たちが再開したアブリ漁に参加して三年、漁民としての実力を養いつつ、シマの漁師の信頼を得ていく一方、賛成派にとっては『ヤマトから反対派の加勢にきたヒッピー』という事で、昨年2月28日私達は漁協加入を不当に拒絶された。我々に対する人权侵害もさることながら漁業权放棄ギリギリの漁協にとって数名の存在が奄美の海の未来を左右しかねない状況に、村民会議の支援をうけて提訴、裁判は勝ち目無

しの賛成派の引き延ばし策に仲々進まず。今年2月15日に第二回公判を終え次回はいよいよ証人調べに入る。この為、本来毎年行なわれるはずの資格審査だが「去年のけり(裁判の結着)がつかないうちに又やるのは道理があわん」という反対派の理事の主張に今年は中止と決定、2月25日の漁協総会では理事、監事の改選予定、理事6名のうち賛成派4名反対派2名監事2名は賛成派この比率がどうなるか。票は79:41...

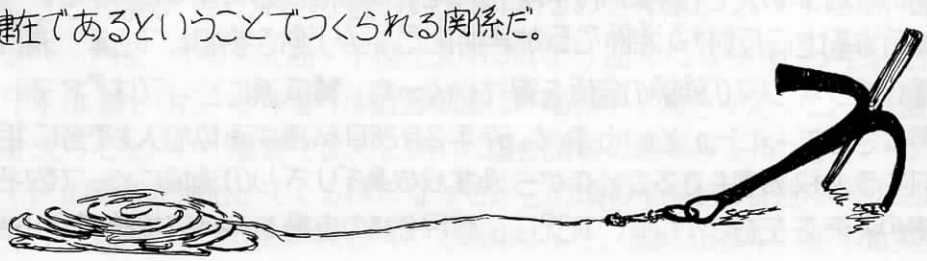
あぶり漁再編

昨年、暮れの漁納めでアブリ組合は解散した。豊漁貧乏など様々な問題に対処できる組合につくりなおす為に一旦白紙に戻してみようということだ。

ネックとなっているのは流通機構だ。小量の水揚だと自分たちで近隣部落へ売りにもまわったが、大漁となると鮮魚という時間と勝負の商品だけに自分たちだけでは限界があった。その為一時に大量に魚のはける場場へともっていったのであるが、そこでは仲買業者に買い叩かれ、結果は豊漁貧乏であった。「ええい、これではやれん」しかし、既にアブリ漁は石油基地を阻止するという任務をおびている。やれる様にしなければならない。

今、冷凍倉庫の話が具体的に進められている。倉庫があれば魚を売り切るまで天気がよくても漁に出れないということはなくなる。出荷量を調整できれば販売部門を独立させることもでき、出漁者が販売にまわる無利は解消されるだろう。それに今までアブリ漁にかかわれなかった体の具合で夜の漁に出れなかった人や女、年寄などが販売をつうじアブリ漁に主体的にかかわることが出来る。又、冷凍倉庫の使い途はアブリ漁にかぎらない。スモモなど果実農作物で利用する可能性もひらけてくる。

問題は資金をどうするかだ。村をはじめ県や国と対立し、反対派に対する差別行政がまかり通る状況で行政に何かを期待できるだろうか。上からのおこぼれを頂戴するというのなら己れが底辺であることを認め固定化することでしかない。冷凍倉庫をつくるとなると今の水揚高でいくと最底一千万は必要だ。今までは資金面のことは網元である山下春英氏が責を負っていたが、個人の犠牲や能力に依存していては限界が見えている。今までは配当率の不適正でただでさえ網元の負担は多い。アブリ組合を解散したのもそれらを改めるる為だ。今共同の力を我々のものにしているかが試されている。地縁血縁も含め技手久闘争を支援してくれる人々にひろく出資を呼びかけるという案が検討されている。どの様な形でやるかはきまってないが、おそらく配当金でつくられる関係にはならないだろう。奄美の海が健在であるということでつくられる関係だ。



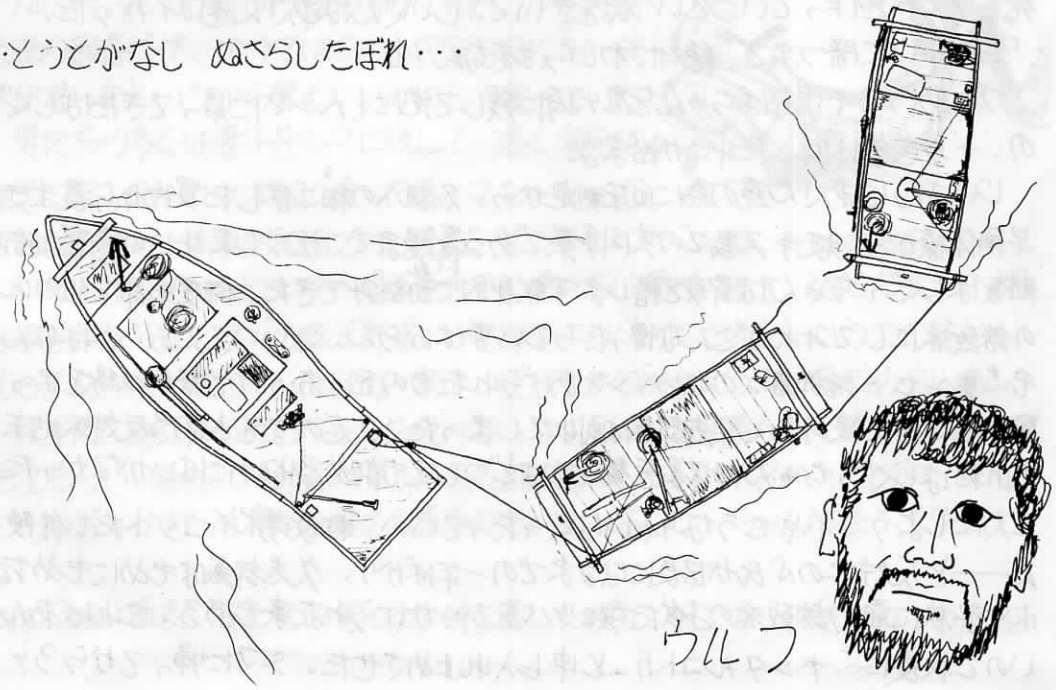
...私...

奄美に入ってもう三年になる。十代半ばから今までこんなに長く一ヶ所にいるのは初めてだ。それまでは長くて半年、数ヶ月と転々としていた。いろんな事をやりはしたが、全て中途半端でほったらかしてきた。それは自分が主体性をもって事に向かわなかったからだ。いつも自分は傷つかない位置にいて逃げ道を用意しているという調子だった。当然ながら満足がいくということはなかったし、肝腎なのは自分の姿勢なのだから、場所をかえてみても同じことの繰り返しであった。無我利道場にきた時も同様であった。アブリ漁、石油基地反対闘争、コミューン、興味をひかれるものはあったがそれはそれでしかない。

しかし、反対闘争のまっただなかにいれば否応なく自分が白黒どの立場をとるのかをはっきりさせねばならなかったし、又無我利道場の狭い家での人のぶつかりあいは自分の中の曖昧なところを自覚させられた。そして逃げ道や逃げ場などは実はないのだということもうすうすわかってきた。投げだす事は今までの繰り返しでしかない。三年たった今でもややもすれば逃げ出しそうになる。それはきまって自己変革を迫られたりする時だ。しかし結局は毎日〜ここでやる事を選びなおしているのだ。

最近になってよおやく奄美で漁師をやるということの意味がわかりかけてきた。漁師をやるにはやれる場を自分でつくるしかない。アブリ漁と同じだ。

網が重いと手の力を抜けば それだけ網は揚がらず 魚は手にはいらない。自分が手を抜けば皆の魚が一気に逃げてしまう。やれる事はそれぞれが力一杯やるだけだ。加勢したりされたりしながら、人手は多いほうがいい。

そろそろ三月 季節風もゆるみだし 海がそのふところを開きはじめる。

・・・とうとがなし ぬぬさらしたぼれ・・・